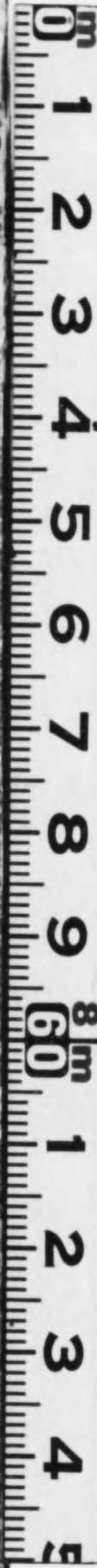


眞宗相承の系譜

特 240

171



始



特240
171

梅原真隆著

眞宗相承の系譜



顯眞學苑發兌



目次

- (一) 正依と傍依……………(一)
- (二) 本師源空の敬信……………(二)
- (三) 偏依善導の旨趣……………(三)
- (四) 五祖相承の展開……………(五)
- (五) 七祖相承の結構……………(六)



眞宗相承の系譜

梅原眞隆

(一) 正依と傍依

眞宗の相承については何人も七祖相承といふことを熟知して居る、これはまことに正しい理解であつて、親鸞聖人はかくのごとくに系譜を明示せられてある。教行證文類即ち御本典の眼睛たる正信念佛偈においてまづこれを指示せられた、「印度西天の論家、中夏日域の高僧、大聖興世の正意を顯はし、如來の本誓機に應せることを明す」と前置して、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空の七高僧を列擧し、「弘經の大士宗師等、無邊の極濁惡を拯濟したまふ、道俗時衆と

もに同心に、唯この高僧の説を信すべし」と結嘆せられてある。

尙ほ、のちに淨土文類聚鈔を撰述したまふや、その念佛正信偈には等しく、この七高僧を列擧し、また高僧和讃においても同様にこの七高僧を列擧せられてあることを注意すると、この七祖相承といふことは終始一貫せる定説であつたことが知られる。

故にこの七祖相承については論議の餘地はないのであるが、たゞ、この相承系譜の意味を如何に解釋すべきであらうか、また如何にしてこの相承系譜が組織せられたのであらうか、こうしたことに關して聊か考察を試みたいとおもふのである。

まづ注意したいと思ふことは、この七高僧の系譜は範圍を限定したものであるか、その基軸を系統だてたものであるといふことである。これについて、まづ行文類に於ける相承の正依と傍依とを瞥見すべきである。

はじめて七高僧の系譜を示された正信念佛偈はその偈前の文によつて明かなるとほり、「大聖の眞言」に歸し、「大祖の解釋」を閲せられた讚嘆であるが、いはゆる「大祖の解釋」なるものは正しくは行文類に於ける念佛の要義を解釋された論釋を指すものである、その論釋には順序正しく且つ周到に三國の七高僧の要文を引證されてある、ところが善導の名號釋義を私釋なされた一段の條下には、次の如く、諸師の釋文を列擧せられてある。

- (一) 淨土五會念佛略法事儀讚〔法照〕云
- (二) 憬興師〔述文贊〕云
- (三) 樂邦文類云、總管張掄云
- (四) 台教祖師山陰慶文法師云
- (五) 律宗祖師元照〔觀經疏、小經疏〕云
- (六) 慈雲法師〔元照觀經疏〕云天竺寺
蓮式

- (七) 律宗戒度〔正觀記〕云元照之弟子也
 (八) 律宗用欽云元照之弟子也
 (九) 三論祖師嘉祥〔觀經疏〕云
 (十) 法相祖師法位〔大經疏〕云
 (十一) 禪宗飛錫〔念佛三昧寶王論〕云

即ち、法照・憬興・張掄・慶文・元照・慈雲・戒度・用欽・嘉祥・法位・飛錫の十一師である。

尤も古來慈雲を元照にとりこんで十師と稱してある、なるほど、さきに「律宗祖師元照云」とのべ、のちに「大智唱云」とかゝげ、その中間に「慈雲法師云天竺寺遺式」及び「慈雲讚云遺式也」と標してある、且つ慈雲の釋は元照の釋のうちから引抄されてあるから、慈雲を元照におさめることも一個の見方でもあるが、しかし別標をかゝげてあるのであるから、獨立して數えてもよいかとおもふ。

尙ほ、この論法で行けば法照から慈愍をひらいて十二師と數ふべきであらうかとおもふ、即ち法照の五會讚のうちに

依般舟三昧經 慈愍和尙

といふ標列のあることを注意すべきであると思ふ。殊にこの慈愍の讚文のうち、「彼佛因中立弘誓、聞名念我總迎來、不簡貧窮將富貴、不簡下智與高才、不簡多聞持淨戒、不簡破戒罪根深、但使廻心多念佛、能令瓦礫變成金」の一節は法照の「如來尊號甚分明、十方世界普流行、但有稱名皆得生、觀音勢至自來迎」の句と共に、源空、聖覺等專修教團の權威者によつて愛誦せられた、そして、わが聖人も崇重せられて唯信鈔文意に註釋なされてある、それは共に法照の五會讚の釋文であるにもかゝらず、「如來尊號甚分明」の釋には「この文は後善導法照禪師とまふす聖人の御釋なり」と註し、「彼佛因中立誓」の釋には「この文は慈愍三藏とまうす天竺の聖人の釋なり」とて、二師を別々に勸請されてある。この釋格から

云ふと、行文類にも慈愍を一人と數えてよいかとおもふ。

かく考へると、つまり、十二師の釋文をひらかれた次第で、古來、傍依十師といふけれども、くわしくは傍依十二師と稱してもよいわけである。

さてこの十師「若くは十二師」と七僧の關係は如何に取扱はるべきであらうか、先哲は七僧を正依の相承とし、十師は相承の傍依となす、これは穩當であらう。殊に、さきの列記によつてわかるやうに、「台教祖師山陰」、「律宗戒度」、「律宗用欽」、「三論祖師嘉祥」、「法相祖師法位」、「禪宗飛錫」と冠せらるゝことは、正信念佛偈に「本師曇鸞」といひ「本師源空」といふに比對してもうなづけるやうに、他宗の祖師であることを認められたものである。そして、これらの他宗の祖師の釋文を以つて證明することは、念佛の不行が專修の教團の獨斷にあらずして、一切の宗派の歸結すべき聖法であることを示されたのであつて、かの信文類に樂邦文類に於ける律宗の元照の語即ち

嗚呼、教觀に明かなること孰か智者に如かんや、終に臨んで、觀經を擧し、淨土を讀じて長く逝き矣。法界に達せること孰か杜順に如かんや、四衆を勸めて佛陀を念じ、勝相を感じて西に邁きゝ矣。禪に參はり性を見ること、孰か高玉智院に如かんや。皆な社を結び佛を念じて俱に上品に登りき矣。業儒有才、孰か劉・雷・柳子厚・白樂天に如かんや。然るにみな筆を秉り誠を書して、彼の土に生せんと願じき矣。

といふを引抄して、各宗の道俗、ともに念佛往生の大道に歸入せることを示されてある。この信文類の引文と對照するとき行文類の十師「十二師」引證は必ずしも、相承の系譜を示すものでなくて、各宗の歸一を示すものとも解せられないでない。さりながら、その各宗の道俗の歸入せることが、そのまゝ廣い意味の相承をしるしづけることにもなり得ると考へられないでもない。

殊に、この十師の中心は最初の法照である、この法照はさきに引抄した唯信鈔

文意に「後善導」と稱せられ。また、高僧和讃にも「世々に善導いでたまひ、法照少康としめしつゝ、功德藏をひらきてぞ、諸佛の本意とげたまふ」とのべられてある。これによると、法照は傍依の地位にたつものでなくて、善導と同様に正依の地位にたつものである。

殊に法雲寺に傳ふる入出二門偈の眞蹟本によると

善導禪師 光明寺

善導和尚義解曰 念佛成佛是真宗

とある、「念佛成佛是真宗」は法然の五會讚の語句である、これを善導の語句とせられたほど、同視されてあることがわかる。

また、近頃三井淳辯氏によつて紹介されたところによると、高田専修寺には宗祖聖人の眞筆である五會法事讚略抄が発見された、これらによつても法照に對する敬重の念が窺はれる（私は七祖聖教の内にこの五會法事讚を編集すべきでない

かといふ意見をもつてゐるのである)

これらによると、法照は善導と共に正依の相承として敬重さるべきであつて、餘他の諸師とは立場は異るともいへる、けれども、十師の中心が法照であるといふことは、十師の全部を善導釋義に従屬せしめやうとする見方であるとも云へる。正念佛偈の「善導獨明佛正意」は獨歩の開顯を讚嘆し、十師の引證は普通の正法を示すもので、彼此相俟つて全貌を示されたともいへる。かくて、十師は善導釋義に統括されるかぎり相承となるとも云へる。

これを要するに、七祖の正依傍依の分別には、さらに微細に考察を要するものではあるが、かゝる正依傍依の分別よりも、七祖系譜は限定か基調かの考察が適切でないかとおもふ、そして、如上の考察によると七祖系譜は相承の基調であつて限定ではないと考察するのが正鵠を得たものでないかとおもふ。

この點から云へば教行信證に現はれた諸師は上述の十二師の外に馬鳴・戒度・宗

曉・智覺・善月・春休・周葵・永觀・淄州・智者・諦觀・從義・傳教・法琳・圓照等も考量すべきである。尙ほ、和讃に於ける菩提流支・少康・懷感・聖德太子等や、尊號眞像銘文に於ける智榮・隆寛・聖覺なども亦た考量すべきである。

(二) 本師源空の敬信

この七祖系譜は相承の基調をなすものであるが、さて、かゝる系譜の要點は何れにあるのであらうか、結局、源空聖人に對する景仰を展開せるものである、源空一師の相承を要點となすものである。

これについて、先づ注意せらるべきは惠信尼文書の詞である。やまをいで、六かくだうに百日こもらせ給ひ、ごせをいのらせ給けるに、九十五日のあか月、しようとくたいしのもんをむすびてじけんにあづからせ給て候ければ、やがてそのあか月いでさせ給て、ごせのたすからんする上人にあひまいらせんと、たづねまいらせて、又六かくだうに百日こもらせ給て候けるやうに、又百か日、ふるにもてるにも、いかなるだいな事にもまいりてありしに、たゞごせの事は、よき人にもあしきにも、おなじやうに、しようじいづべきみ

ちをば、たゞ一すぢにおほせられ候しをうけ給はりさだめて候しかは、しやうにんのわたらせ給はんところには、人はいかに申せ、たとひあくだうにわたらせ給べしと申ともせしやう／＼にも、まよいければこそありけめとまで思まいらするみなればと、やう／＼に人の申候し時も、おほせ候しなり。

この記録は吉水入室のときに於ける聖人の心理を描いたものであるが、これは後、晩年に仰せられた詞、嘆異鈔の記録と對比していよく力強くひゞく。即ち歎異鈔の第二條に

親鸞にをきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせを蒙りて信するほかに別の仔細なきなり、念佛はまことに淨土にむまるたねにてやはんべるらん、また地獄にをすべき業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり、たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におりたりともさらに後悔すべからずさふらう。

とある、始終一貫して「よきひと」即ち源空聖人に對する絶對歸依を表示するもので源空一師の相承をしめされるものである。また高僧和讃の源空章に「阿彌陀如來化してこそ、本師源空としめしけれ」と讃せられ、また「善導源信すむとも、本師源空ひろめずば、片洲濁世のともがらは、いかでか眞宗をさとらまじ」と嘆せられたのも一師相承の感激である。

さらに、御消息のうへにも、このことがあざやかに現はれてゐる。即ち、御消息は恩師追慕の結晶である、御消息のいたるところに恩師追慕の懇念があらはれてゐる、今試みに、これを抄録すると次のとおりである。

專信房への御報

たゞ、佛にまかせまいらせ給へと、大師聖人のみことにて候へ。

かさまの念佛者疑問

如來の御ちかひなれば、他力には義なきを義とすと聖人のおほせごとにてあり

乗信坊への御消息

故法然上人は浄土宗の人は愚者になりて往生すと候しことを、たしかにうけたまはり候。

慶西坊への御返事

彌陀の本願を信じさふらひぬるうへには義なきを義とすところ、大師聖人のおほせにてさふらへ。

浄信坊への御消息

如來の誓願には義なきを義とすとは、大師聖人の仰に候き。

唯信坊への御返事

すべて浄土の念佛者のことなり、このやうは故聖人の御とき、身どものやうやうにまふされさふらひしことなり。

その他、有名な自然法爾の御文のうちには「きゝてさふらふ」とか「きゝならひてさふらふ」とか仰せられて、源空聖人を相傳せるむねを表白されてある。かやうに、「無義爲義」とか、「自然法爾」とかいふ浄土眞宗の本質的要素がすべて源空聖人からの傳統であるといふ表示はまさしく一師相承を示すものである。

實に大觀すると、教行信證はまさしく選擇集の眞實を顯開したものである、尤も、教行信證のうちに選擇集を引用せるは、行文類に一箇處あるだけである。

選擇本願念佛集源空集云、南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本

又云、夫速欲離生死、二種勝法中、且闍聖道門、選入淨土門、欲入淨土門、正雜二行中、且拋諸雜行、選應歸正行、正助二業中、猶傍於助業、選應專正定、正定之業者、即是稱佛名、稱名必得生、依佛本願故、

けれどもこの引文は專修念佛の要文であつて、これだけの要文の引用は選擇集の全卷を引用せると同じことである。分量からいへば僅少であるやうでも、實

質からいへば全體である。而して、行文類だけに引用せられたのでなくて、この行文類に引用せる専修念佛の要文こそ教行信證全體にゆきわたる主題である。それ故に教行信證の後序には選擇集を鑽仰して

選擇本願念佛集は禪定博陸の教命に依りて、撰集せしむるところなり、眞宗の簡要、念佛の奥義、斯に攝在せり、見るもの諭り易し、誠にこれ希有最勝の華文、無上深甚の寶典なり。

と申されてある。してみると、宗祖聖人はひとへに「よきひとのおほせ」即ち源空聖人の専修念佛の示教をかうむりて隨順し奉行なされたことは愈々明白である。これ殊に一師相承の旨趣を注意せんとする所以である。

而して、源空聖人もまた親鸞聖人を純正なる傳統者として信頼せられたのであつた、教行信證の後序によれば、元久二年に選擇集を付屬せられ、また、御眞影の見寫を許し親しく銘を記して與へられてある。撰述付屬と眞影見寫は師資的傳

を證するに足る事實である。數おほき門下のうち選擇集の付屬をうけたものは極めて稀れである。西山の善慧上人は勘文役であつたから且く措き、その他では鎮西の聖光上人と長樂寺の隆寛律師とわが親鸞聖人とあるだけである。仍つてわが聖人はその知遇を感佩して後序には

年を涉り日を涉りて、その教誨を蒙るの人、千萬なりといへども、親といひ疎といひ、この見寫を獲るの徒甚だ以て難し、しかるに既に製作を書寫し眞影を圖畫せり、これ専念正業の徳なり、これ決定往生の徴なり、仍つて悲喜の涙を抑へて由來の縁を註す。

と仰せられたのは、まことに自然である。これらの事實を検討したゞけでも、源空聖人と親鸞聖人との親しい交渉を窺知すべきである。

因に愚勸住信の集述にかゝる私集因縁集第七卷、我朝佛法王法緣起由來の條下に

黒谷源空上人法然自開ニ大經藏、興ニ淨土ノ教門、而、一向專修、弘通于、是盛也、
 門下ニ幸西成覺一念、義元祖、聖光鎮西義、元祖、隆寛長樂寺多、念義元祖、證空善惠坊西、山義元祖、長西九品寺之諸行、本願義之元祖有之
 門徒數千萬、上足、此、五人也、其、外有三人、付ニ選擇集、又高野、明遍僧都、
 出雲路、明禪法印等、皆行、之、加、之、出雲路、住心上人天台ノ、學者、生馬良遍法印法相
 學、木幡、真空上人三論、眞言、知足院、悟阿上人律宗、法相、是等雖、非ニ法然、門弟、皆是、淨
 土修行之人也。

といふものがある。これは源空門下の諸流及び選擇付屬を察知する素材になるものであるが、このうち「其外有三人、付ニ選擇集」とあるは、わが親鸞聖人のことを意味するのではないかと推測される。

ところが法然聖人の貶斥せられた「北越の一邪人」なるものは、わが親鸞聖人のことでないかといふについて、古來いろいろに議せられてゐる。近時の學者のうちにもこの問題はいろいろに議せられてゐる、仍つて、かゝる疑問の生起する素材

をかゝり、それを検討しておくことゝしよう。

この問題の素材として取扱はれるのは二つある。一は法然聖人が「光明房へつかはされた御返事」と他は「遣北越書」とである。いくらか煩しいやうにもあるが、讀者の便宜をはかり、且つは問題の真相を鮮やかにするために、兩個の文書の全分を左に引鈔する。

前者の御消息、すなはち光明房への御返事は西方指南鈔と和語燈錄と法然上人行狀繪圖（勅修御傳）等にのせてある。西方指南鈔は康元元年に親鸞聖人の書寫せられた眞蹟本が高田の専修寺に傳はつてゐる。この鈔の編者も亦親鸞聖人であると認めなくてはならない。康元元年は法然上人の遷化せられた建曆二年を去ること四十四年であつて、法然上人の法語類を集録せる最初のものである。次に和語燈錄は望西樓了惠が文永十二年に纂輯せるところであつて、法然上人の遷化を去ること六十三年、西方指南鈔におくるゝこと十九年である。そして勅修御傳は

徳治の初、叡山功德院の舜昌が後伏見上皇の勅を蒙りて選集せるものと傳へられ、和語燈録の編集に後るゝこと凡そ三十年である。故に、このうち西方指南鈔は最古の記録であるから、今これによつて全文を左に鈔録する。而して、この光明房への御返事は三書共に略々同一で、僅かに文字が少しく違つてゐるだけであり、勅修御傳は中間の一節を省略するだけである。

故聖人の御坊の御消息

一念往生の義、京中にも粗流布するところ也。おほよそ、言語道斷のことなりまことに、ほとおと御問におよぶべからざるなり。詮ずるところ、雙卷經の下に乃至一念信心歡喜といひ、また善導和尚は上盡一形下至十聲一聲等定得往生乃至一念無有疑心といえる、これらの文をあしくぞ、みたるともがら、大邪見に住して、申候ところなり。乃至といひ、下至といえる、みな上盡一形をかねたることはなり。しかるを、ちかごろ、愚痴無智のともがらおほく、ひとへに

十念一念なりと執じて上盡一形を廢する條、無慚無愧のことなり。まことに十念一念までも、佛の大悲本願なほかならず引接したまふ無上の功德なりと信じ、一期不退に行すべき也。文證おほしといへども、これをいたすにおよばず、いふにたらざる事なり。こゝにかの邪見の人、この難をかふりて、こたへていはく、わがいふところも、信を一念にとりて念すべきなり、しかりとて、また念すべからずとはいはずといふ。これまた、ことは尋常なるに、にたりといえども、こゝろは邪見をはなれず。しかるゆへに、決定の信心をもて、一念してのちは、また念せずといふとも、十惡五逆なほさわりをなさず、いはむや餘の少罪をやと信すべきなりといふ。このおもひに住せむものは、たとひおほく念ずといはむも阿彌陀佛の御こゝろにかなはむや。いづれの經論人師の説ぞや、これひとへに、懈怠無道心、不當不善のたぐひの、ほしいまゝに惡をつくらむとおもひて、「また念せばその惡かの勝因をさえて、むしろ三途におちざらむ

や。かの一生造悪のもの、臨終に十念して往生する、これ懺悔念佛のちからなり、この悪の義には混すべからず。かれは懺悔の人なり、これは邪見の人なり、なほ不可説不可説の事也。もし精進のものありといふとも、この義をきかば、すなはち懈怠になりなむ。まれに戒をたもつ人ありといふとも、この説を信せば、すなはち無慚なり」(括弧中勅修御傳「省略」)おほよそ、かのごとき人は、附佛法の外道なり、師子のみの中の虫なり。また、うたがふらくは、天魔破句のために、精進の氣をうばわるゝともがらの、もろくの往生の人を、さまたげむとするなり。あやしむべし、ふかくおそるべきもの也。毎筆端につくしがたし。謹言。

これは越中國に光明房と申すひじり、成覺房が弟子等、一念の義をたて、念佛の數返をとゞめむと申て、消息をもわざと申候、御返事をとりにて、國の人々にみせむとて申候あひだ、かたのごとくの御返事候き。

さてこの御消息はいかなる性質のものかといふことは、上記の西方指南鈔の編者の附記で明瞭である。即ち越中の光明房が、成覺房の弟子等が一念義を主唱するのを見て、これを停止せんために、法然聖人へ具陳し、その正意を御返事を乞ふて、これを是正せんとしたときに與へられたものである。これによると成覺房の弟子等も越中にあつたやうである。和語燈錄にはかゝる附記はないけれども、標示に「越中の國光明房へつかはす御返事」とあつて、西方指南鈔とは毫も矛盾しない。若し、これだけであれば、即ち越中の國に於ける出來ごとゝすれば、親鸞聖人とは何等の聯想をもさしはさまないですむのである。ところが勅修御傳にはこの御消息に前書して次の如くのべてある。

成覺房の弟子等、越後國にして、一念義を立けるを、上人の弟子光明房といふひじり、多念の行者なりけるが、心えぬことに思て、かの所述の法門をしるして、上人にうたへ申いければ、御返事云。

これは西方指南鈔の附記と略同一であるが、たゞ違ふところは成覺房の弟子等が「越後國」にわたしてある點である。こゝに微細な、しかしながら注意すべき轉化がある。若し越後とすれば越後國府へ配流せられた親鸞聖人を聯想しやうとしかけるのである。

越中と越後とは隣國ではあるけれども、親不知の天險によつて隔てられてゐるのであるから、かなりの隔歴がある。そして越後の配流時代の親鸞聖人の感化が越中に及び、光明房の地盤を覆すほどの勢力を有してゐたとは想像されない。門侶交名牒をみても、親鸞聖人の弟子は越後に一人を記してある丈けである。

また、若しこの御返事が親鸞聖人及びその一味を對手として「附佛法の外道なり、師子のみの中の虫」と擯斥せられたものであるなら、かゝる文書を親鸞聖人が自ら西方指南鈔に編輯せらるゝのは大膽すぎる。

仍つて、この光明房への御返事は、成覺房の弟子等が北陸で一念佛をととなへた

ことを擯斥されたもので、親鸞聖人とは全く關係はないと解するのが正當であらう、勅修御傳の「越後國云々」はむしろ後代の想像の摺入であると私は解する。

次に「遣北越書」なるものは、漢語燈錄、法然上人傳記(九卷傳)、法然上人行狀繪圖(勅修御傳)等にのせてある。このうち漢語燈錄は望西樓了惠が前記の和語燈錄を纂輯した前年即ち文永十一年に集録したものである。次に九卷傳は作者の名を逸してゐるけれども、舜昌の勅修御傳より後時代で、その抄録であらうと、一般に承認さるゝものである。このうち九卷傳にあげたものは最もくわしく、漢語燈錄はやゝ短い。いま最初の記録として左に漢語燈錄のものを抜記する。

當世赴念佛門行人等中、多以有無智誑惑之輩、不知一宗廢立、不了一法之名目、意無道心、身求利養、因茲、恣構妄語、迷亂諸人、偏是爲渡世之計、全不顧來世之罪、好弘一念之僞法、無謝無行之過、剎立無念之新義、猶失一稱之小行、雖微善於善根、削跡雖重罪於罪根、增勢、爲受利那

五欲之樂、不_レ畏_二永劫三途之業、教_二示人_一云、憑_二彌陀願_一者、勿_レ憚_二五逆_一任_レ心造_レ之。不_レ可_レ着_二袈裟_一着_二直垂_一、不_レ可_レ斷_二婬肉_一恣_レ食_二鹿鳥_一云々。弘法大師釋_二異生羝羊心_一云、但念_二婬食_一如_二彼羝羊_一云々。此輩只就_二弊欲_一偏彼類哉。十住心中_二惡道心也_一、誰不_レ哀_レ之哉、非_二雷妨_一餘教、還失_二念佛行_一、勸_二懈怠無慚_一之業、示_二捨戒還俗之儀_一、此本朝無_二外道_一、是既天魔構也、破_二滅佛法_一惑_二亂世人_一隨_二此教訓_一者癡鈍之所_レ致也、雖_レ未_レ學_二教文_一有_レ識之人倫何可_レ信_レ之哉。善導和尚所造觀念法門云、唯須_二持戒念佛_一和尚弟子_二三昧發得懷感法師群疑論云求_二都率_一者勿_レ毀_二西方行人_一、願_二西方_一者莫_レ毀_二都率之業_一、各隨_二性欲_一任_レ情修學云云安養行人若欲_レ隨_二此教_一者、逐_二祖師跡_一隨_レ分守_二戒品_一不_レ作_二衆惡_一、不_レ妨_二餘教_一無_レ輕_二餘行_一、惣於_二佛法_一成_二恭敬心_一、更修_二三萬六萬之念佛_一當_レ期_二五門九品之淨土_一矣、而近日北陸道、中有_二一誑法者_一、構_二妄語_一云、法然上人七萬遍念佛是只外方便也、內有_二實義_一、人未_レ知_レ之、所謂心知_二彌陀本願_一身必往_二生極樂_一、淨七

之業於_レ是滿足此上何過_二一念_一雖_二一返_一重可_レ唱_二名號_一哉、於_二彼上人禪坊_一門人等有_二二十人_一談_二祕義_一之處、淺智之類者性鈍未_レ悟、利根之輩僅有_二五人_一得_二此深法_一、我其一人也、彼上人己心中之奧義也。容易不_レ授_レ之擇_レ器可_レ令_二傳授_一云云、風聞說若實者皆以虛言也、一事無_二相似_一、凡不可_レ說、言語道斷、雖_レ不_レ足_レ論爲_レ哀_二迷者_一今立_二誓言_一、貧道若祕_レ之僞宣_二此旨_一註_二不實事_一者、十方三寶當_レ垂_二知見_一、每日七萬返念佛併空失_二其利益_一、圓頓行者之從_レ初緣_二實相_一修_二六度_一萬行_二至_二無生忍_一、何法無_レ行得_レ證乎、乞願經_二此疑網_一之類、切_二邪見稠林_一瑩_二正直心地_一、通_二將來鐵城_一登_二終焉金台_一、胡國程遠通_二思於雁札_一北陸境遙、開_二心於像教_一山川雲重、隔_二面於千萬里之月_一、化導緣原近_二膝干_一佛土之風、加_レ之、誑惑之輩、未_レ讀_二半卷書_一、不_レ受_二一句法_一空號_二弟子_一、甚無_二其謂_一己身智德闕爲_レ使_二人信用_一恣說_二外道_一爲_二師匠教_一或自立_二稱名弘願門_一、或任_レ心作_二謀書_一號_二念佛文集_一、此書中、初作_二僞經_一新備_二證據_一念佛祕經是也。華嚴等大乘之中作_二所

無本經文云不可爲諸善只可勤專修一念云云。彼書、今現流ニ布華夷。智者雖見可嗤愚人莫信受之（中略）抑貧道從山修山學之昔五十年間、廣披閱諸宗章疏、叡岳所無者尋之他門必遂一見鑽仰年積聖教殆盡、加之或一夏之間修四種三昧、或九旬之中行六時懺法、年來長齋修練顯密諸行、身既疲老後、勤念佛、今就稱名之一門、雖期易行之淨土、猶於他宗教文悉成敬重。況素所尙之眞言止觀哉、傳持本山黑谷寶藏有所闕之聖教者猶重奉書寫補之而新發意之侶愚闇後來之客未見其往昔不知此深奧、僅聞念佛之行儀猥成偏愚之邪執、嗚呼哀哉可傷可悲。有智之人見之達旨其趣粗載先年之頃所註之七箇條教誡之文、子細多端不能毛舉而已。

承元三年己巳六月十九日

沙門 源 空 御判

この文書の性質については一般の漢語燈録にはたゞ「遣北越書」と標してあるだけでつまり北越の邪義を撥斥せられた文書である、北越は北陸のことで、必ず

しも越後でない。だからこの古本の漢語燈には「遣北陸道書狀」と標し「近日北陸道の中に一の誑法の者あり」といつてある。ところが九卷傳になると頗る具體的になつてきてゐる、その前書の詞にいはいはく

爰上人、配國の後、成覺坊の弟子善心坊といへる僧、越後國にして專此一念義を立けるに、光明坊といへるもの、不心得事に思て、承元三年夏の比、消息をもて上人に尋申けるに付て、配所にてかゝれたる一念義停止の狀に云。

これによると、この文書は光明房へおくられた返事となつてゐる、そして事件は「越後國」となり、更に「成覺坊の弟子善心坊」と明白に指示してある。いかにも越後配流中の善信坊即ち親鸞のやうに想像される。

勅修御傳には「光明房の狀につきて、上人、一念義停止の起請文を定めらる」となつて、前記の光明房への御返事と立派に聯絡をつけてある。しかし、注意すべきことは「善心坊」といふ指示はない。

上の素材を検討して氣づくことは、西方指南鈔及び和漢の語燈録では、この一念の邪義は成覺房の弟子等が越中の國で主唱したことになる。然るに九卷傳及び勅修御傳に至つて越後に行はれた邪義と轉化し、更らに九卷傳では「善心坊」と具體化せられたのである。要するに、かなり後代になつてから、親鸞聖人を聯想せしむるやうな具體化が行はれたので、本來かゝる具體的な記録はなかつたのである。

こゝに九卷傳及び勅修御傳の傳記者の心事を想像してみたい。私はこの傳記者は敢て親鸞を傷けやうなどいふ意志を抱いて居たとは想像したくない。たゞ、具體化しやうといふ意志があつたのであらう、具體化しやうとしたときに、これまであまり教界の注意にのぼらなかつた親鸞聖人が京洛において廟堂までできて注意されてきた、そしてその親鸞聖人が善信といふことや越後に配流された事蹟をきいて、北越の一念義はその親鸞聖人であつたのだらうと聯想した、そして、九卷傳には「越後」と轉化し、更らに「善心坊」とかいてみたのである。しかし

それもあまり想像にすぎる不安のあるところから、勅修御傳のときに善心坊といふ指示だけは削除したのであらう。かくて「越後の善心坊」といふ指示は九卷傳記者の想像的具體化にすぎないことを注意したい、今日の學者のうちにもかゝる想像をする人があり、また實際において聯想されやすいことでもある。しかし微細に注意したら、實は親鸞聖人を聯想しがたい文書である。

因に喜田博士はこの勅修御傳に善心坊の指示を抜いてある點を會釋して、次の如くのべられた。

勅修御傳が淨土宗鎮西派の手で出來た頃には、其本山なる智恩院と本願寺と隣同士で、實際其の間柄も圓滿に交際つて居たのであるから、よしや善心坊の名がわかつて居たとしても、本願寺側で隠したがつて居るものをわざ／＼加へる必要がなかつたのかも知れぬ。

しかし、この博士の想像にすると、勅修御傳と同時代の九卷傳にもかゝる遠慮

がなくてはならない筈でなからうか。九卷傳に至つて始めて「善心坊」の指示あるは、博士の想像を裏切る。これは私の前述の推考が寧ろ妥當であらう。

かくて、九卷傳の前書によつて、「遣越北書」や「光明房への御返事」を、親鸞聖人に附會しやうとする聯想説には、首肯しかねる。進んで、「遣北越書」の本文を熟讀する。そこには親鸞聖人と解しがたい點がある。

「誑惑之輩未_レ讀_ニ半卷書_一不受_ニ一句法_一空號_ニ弟子_一甚無_ニ其謂_一」とあるが、教行信證の流通分が否定せられないかぎり、親鸞とは別人でなくてはならない。また、親鸞聖人ほど博覽の學徒はない。

「或自立_ニ稱名弘願門_一、或任_レ心作_ニ謀書_一號_ニ念佛文集_一、彼書中、初作_ニ僞經_一、新備_ニ證據_一、念佛祕經是也、華嚴等大乘之中作_ニ所_レ無本經文_一云、不_レ可_レ作_ニ諸善_一、只可_ニ勤專修_一一念_一云云。彼書今現流_ニ布華夷_一、智者雖_レ見可_レ嗤_一とある。親鸞にはかゝる念佛文集の述作もなく、また念佛祕經といふ僞經謀作のこともない。教行信證

をこれに附會する如きは全く無謀であつて年代も同致せず、内容も該當しない。だから、「遣北越書」を親鸞撰斥の文書と解することは首肯されない。

更らに思切つて云へば、「光明房への御返事」とこの「遣北越書」とを一具の文書とすることもなほ考量の餘地がある。西方指南鈔にはこの「遣北越書」はのせてないのである。また光明房への御返事は多人數の異執を對象とし、遣北越書は一人を對象としてゐる。また、「遣北越書」も原型のまゝ傳つてゐるかどうか疑問である、それは漢語燈錄のものと九卷傳のものにかなり相違の存することをみてもわかる。

尤も、親鸞聖人は實際は邪義をとなへたのでないが、多念義の光明房が、親鸞聖人を譏誣したのである、それを法然上人は遠隔の地で事情不明のところから親鸞聖人を誤解して斥擯した文書で、こゝにはゆる「北越の一邪人」は親鸞聖人であると想像する説がある。けれども、私は肯認されない。その所説の如きは譏

誣しやうとすれば讒誣されしやうが、華夷に流布する書物などは讒誣しやうにも讒誣し難いものである。

想像を以つて推考するなら、寧ろ反對のものが現はれる、親鸞聖人は越後の配流時代はそんなに傳道や化他の運動を起さない、愚禿の更生期として自己を視つめてゐられた時代である。そんなに隣國の光明房の立場を覆すほどの勢力や、華夷に流布するほどの宣傳書を公にする時代ではない。これを要するに、私はこの兩個の文書によつて、親鸞聖人撥斥説を立證せんとする諸説を首肯しかねるものである。

尙ほ、私の見方を有力ならしめるものがある、それは十卷傳である、十卷傳にも九卷傳と同じく善心坊といへる越後の一念義の主唱者を示してゐる、即ち「一念邪義流布事」の條下に「成覺房弟子善心坊と云へる僧」を撥斥してゐるのに、一方には「親鸞聖人入淨土門之事」の一條がある。してみると、一念義の善心房

と親鸞聖人とは別人として取扱はれてゐるわけである。

然るに、鎮西家の宗徒はあくまで九卷傳の「善心坊」を親鸞聖人に附會しようとして、いろいろな技巧まで弄せられた形跡がある。序にそれらをも検討しておかう。

まづ、寛文八年刊行の聖光上人著念佛名義集の附録には、一念義停止の狀をのせて「本朝高祖傳記抜古本寫」として抜萃し、その「成覺坊の弟子善心坊」の傍註に「親鸞のこと也」と書加へてある。それが寛政四年に關通の刊行した平假名本には「親鸞のこと也」といふ傍註を本文の割註として變形さしてある。これは附加の文字を本文と見分けのつかないやうにした技巧である、こうしたところに一種のづるい工夫をみる。さらに露骨なのは義山の翼贊の記述である。

念佛名義集銘心抄云三卷
鎮西御作也に、爰に上人配國の後、成覺房の弟子善心坊といへる僧と示して、念佛名義集の附録に抜萃せられた文書を、いかにも鎮西聖光上人の記

述であるかのやうに見せかけ、やがて翼賛遺事に至りては

上人(法然)配國之後、覺盛法師(成覺)、後號 綽空親鸞と相伴ふて、越後の國に下向し(中略)相共に戒を捨て師の教誡を廢す。是に依て永く門弟を放たる

と記して、遂に親鸞聖人は法然上人から門弟を放たれたものとまで、技巧してある。けれどもこれらは悉く徳川時代に入つて、眞宗と浄土宗の鎮西派との諍論がさかんになつたところから、鎮西の宗徒が眞宗を非難せんとして試みた技巧にすぎないのである。もともと、九卷傳の「善心坊」が上に述べたやうに怪しいのにこれを親鸞聖人として附會し、遂に北越の邪人として斥けることは不當な技巧である。

これが技巧である證據には靜見の勘録した法水分流記には親鸞聖人を法然上人の直弟とし

大谷門徒 號一向宗

として系譜づけてある、靜見は深草流祖顯意道教の孫弟子であつて、大和の來迎寺の開基である、親鸞聖人については公正な立場に立てる人であつたわけである。この靜見が法然滅後百六十六年、親鸞滅後二百十六年の永和四年に録した法水分流記は比較的有力な古記録として尊重せらるべきである。この分流記には親鸞を幸西の弟子として記さず、法然の直弟としてあることは公明に事實を傳へたものと云ふべきである。また鎮西系にありても、空譽の宗派流傳や、西譽の三國佛祖傳集には親鸞聖人を法然上人の直弟子として示してゐる。

これらを檢閲しても、念佛名義集の刊本や義山の翼賛等が誣難であることが明白である。

(三) 偏依善導の旨趣

さて、法然上人の教義を敬信せられた親鸞聖人は、同時に法然上人の相承觀をも繼承せられた。その法然上人の相承觀には二様式あつた、第一は偏依善導の様式であり、第二は五祖相承の様式である。

上に述べたとほり元久二年に法然上人は親鸞聖人に眞影見寫を許して、銘を書いて授與されたがそのときの銘は次のとほりである。

眞影ノ銘、以眞筆令書ニ、南無阿彌陀佛與、若我成佛十方衆生、稱我名號、下至十聲若不生者、不取正覺、彼佛今現、在(世)成佛、當知本誓、重願不虛、衆生稱念、必得往生ノ之眞文ニ云云

この銘文は善導大師の往生禮讚の要文である。これ偏依善導の表示に外ならな

い。
この眞影の銘文を頂戴して、感佩されたのは歎異鈔第二條に現はれた仰せである。

彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の説教虚言なるべからず、佛説まことにおはしまさば、善導の御釋虚言したまふべからず、善導の御釋まことならば法然のおほせそらごとなんや、法然のおほせまことならば、親鸞がまふすむねまたもてむなしかるべからずさふらうか。

このおほせは全く眞影銘文と符節を合するものである、法然上人が自己の眞影に往生禮讚の要文を示されたのは全く「法然のおほせ」に「善導の御釋」をしめすものである。その「善導の御釋」なる往生禮讚の要文は全く「彌陀の本願」と「釋尊の説教」を結晶せしめたものである。「若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺」は本願文の取意であり、「彼佛今現、在世成佛、當知本誓、重願不虛、衆生稱念、必得往生」は本願成就文の取文である。前者は「彌

陀の本願」であり、後者は「釋尊の説法」である。これによると、偏依善導の源空教義を信受せられた親鸞聖人には、源空一師の景仰がそのまま善導、法然の二祖相承となるわけである。

仍つて、まづ法然上人の偏依善導の様式を窺ふこととする。選擇集の終に專修念佛の要義を成立せしむべく三重の選擇を決してのち、これは善導の古今楷定の批判の開展たるを示して、次の如く問答往復をかさねてある。

問ていはく、華嚴、天台、眞言、禪門、三論、法相の諸師、をのく淨土の法門の章疏をつくれり、なんぞかれらの師によらずして、たゞ善導一師をもちゐるや。こたへていはく、かれらの諸師、をのくみな淨土の章疏をつくるといへども、しかも淨土をもて宗とせず、たゞ聖道をもてその宗とす、かるがゆへに、かれらの、諸師によらざるなり。善導和尚はひとへに淨土をもてしかも宗として聖道をもて宗とせず、かるがゆへに、ひとへに善導一師に依る。問て曰

く。淨土の祖師其數又多し謂く弘法寺の迦才慈愍三藏等是れなり。何ぞ彼等の諸師に依らずして唯善導一師を用るや。答て曰く。此れ等の諸師淨土を宗とすと雖も未だ三昧を發さず。善導和尚は是れ三昧發得の人なり道に於て既に其の證あり故に且く之を用る。問て曰く。若し三昧發得に依れば懷感禪師亦是れ三昧發得の人なり何ぞ之を用ゐざるや。答て曰く。善導は是れ師なり懷感は是れ弟子なり故に師に依て弟子に依らず況や師資の釋其の相違甚だ多し故に之を用ゐず。問て曰く。若し師に依て弟子に依らざれば道綽禪師は是れ善導和尚の師なり。抑又淨土の祖師なり何ぞ之を用ゐざるや。答て曰く。道綽禪師は是れ師なりと雖も未だ三昧を發さず故に自ら往生の得否を知らず、善導に問て曰く。道綽念佛往生を得んや否や。導一莖の蓮華を辨じて之を佛前に置かして行道七日せんに萎悴せず即ち往生を得てん。之に依て七日果然として萎み黄ます。綽其の深詣を歎す因に入定して當に生ずることを得べきや否やを觀せんことを

請ふ。善導入定して須臾に報じて曰く。師當に三の罪を懺して方に往生すべし。一には師嘗て佛の尊像を安じて檐牖の下に在きて自は深房に處せり。二には出家の人を驅使し策役す。三には屋宇を營造するに虫の命を損傷す。師宜く十方の佛前にして第一の罪を懺じ四方の僧の前にして第二の罪を懺じ一切衆生の前にして第三の罪を懺すべし。綽公靜に往の咎を思ふに皆虚しからずと曰ふ。是に於て洗心悔謝し訖て導に見ゆ即ち曰く師の罪滅しぬ。後當に白光ありて照燭すべし是れ師の往生の相なり。(已上新修往生傳)爰に知ぬ善導和尚は行三昧を發し力師の位に堪たり解行凡にあらざること將に是れ曉けし。况や又時の人諺に曰く。佛法東行してより已來未だ禪師の盛なる徳のごとくなるはあらず。絶倫の譽れ得て稱ふべからざる者か。加之觀經の文義を條録せしの刻頗る靈瑞を感じて屢聖化に預る既に聖の冥加を蒙て然も經の科文を造る世舉て證定の疏と稱す人之を貴ぶこと佛の經法の如し。(中略)靜に以れば善導の觀經の疏

は是れ西方の指南行者の目足なり。然れば則ち西方の行人必ず須く珍敬すべし。中に就て毎夜夢中に僧ありて玄義を指授す。僧といふは恐くは是れ彌陀の應現なり。爾らば謂つべし此の疏は是れ彌陀の傳説なり。何に況や大唐の相傳に云く。善導は是れ彌陀の化身なりと。爾らば謂つべし又此の文は是れ彌陀の直説なり。既に寫せんと欲はん者は一ら經法の如くにせよといへり。此の言誠なるかな仰て本地を討れば四十八願の法王なり。十劫正覺の唱へ念佛に憑みあり。俯して垂迹を訪へば專修念佛の導師なり。三昧正受の語往生に疑ひなし。本迹異なりと雖も化導是れ一なり。是に於て貪道昔し茲の典を披閱して粗素意を識る立ろに餘行を捨て茲に念佛に歸しぬ。其れより已來今日に至るまで自行化他唯念佛を緯とす。

これによると、聖道門を宗とする淨土釋家を簡去せることはいふまでもなく、淨土門を宗とせる先賢古哲のうちにて、三昧を發得せざるものは悉く簡び去つ

て、たゞ善導一師に依據せられたことが明白に現はれてゐる。さらに注意すべきことは等しく善導流の念佛者として承認せられ、且つ善導と師資の關係を有せる道綽や懷感をも顧みずして、善導一師を重せられた點である。

この選擇集の偏依善導の表白は阿彌陀經釋及び源智の記せる隨聞記を參照するとき一層明白となる。すなはち阿彌陀經釋に

双卷無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經、淨土三部の妙典、或は菩薩の論說に依り、或は人師の解釋に據つて、之を講讀し畢ぬ。經の大旨念佛の深義に至つては、専ら善導和尚を以て用て依憑と爲す焉。(中略)予、昔、叡峰に在て天台の餘風を扇ぎ、玉泉の下流を抱て、三觀六即を以て疑雲いまだ披けず、四教五時にをいて迷闇いまだ曉けず、況んやまた異宗他門に於てをや、粵ごうに、善導所立の往生淨土の宗に於て、經論ありといへども讚仰するに人なし、疏書ありといへども習學するに倫なし、是を以て相承血脈の法に疎く、面授口訣の義に乏

し、夜光、晦冥に従ふ、何ぞ敢て恐嘆せざらん、予因つて少らく佛意を探つて粗々聖訓を窺ひ、三昧發得の妙誨に従つて、九品往生の義意を宣ぶ。愚見敏ならず、深理何ぞ當らん、況んやまた章疏の文義幽遠なるをや、導師に遇はずんば決智生じ難く、支那に遊ばずんば遺訓了し難し。

とのたまふ。また、隨聞記には

一時、師(源空)かたりていはく、淨土を弘通するの師、世々これおほし、みな菩提心を勧め、且つ觀察を以て正と爲す、たゞ善導一師、菩提心を發さざるも亦た往生を得と許す。また、觀察を判じて以て稱名の助業となす、當世の人若し、善導の意に依らずんば則ち恐くは往生を得難からん、曇鸞、道綽、懷感等みな相承の人師と爲すと雖も、しかもその義に至つては則ち未だ必ずしも一準ならず、當に能くこれを辨別すべし、若しこの旨を辨せずんば、往生の難易において冥然惑あらん。

と書記せられてある。

殊に、この隨聞記に至つては、偏依善導の教義的本質を示してゐる。何ち稱名を正定業とし、觀察を助業とせられた善導大師は、觀察を以て念佛の本格となす聖者的見解をすて、稱名こそ本願の規定するところであるとして凡夫直入の大道を開顯せられた、以つて宗旨の純正な發展を成就せられたことを鑽仰して、このすぐれたる批判をうけつがれたのが偏依善導の旨趣であるとうなづかれる、こゝうした見地から「曇鸞・道綽・懷感等みな相承の人師と爲すと雖も、しかも、その義に至つては、即ち未だ必ずしも一準ならず」とて、微細な辨別を要求せられたのである。

かゝる偏依善導の相承觀はもちろん教義的理由にもとづくものであるが、法然上人が淨土門に歸入せられた現實的因縁と、その敬虔な感激が深い根底をなしてゐることをも觀てとらねばならぬ。

法然上人が淨土門に歸入せられたのは、全く善導大師の觀經疏によるものである、上に引出した選擇集に

貧道(法然)昔し、茲の典(觀經疏)を披閱して、粗素意を識る。立ろに餘行を捨て、茲に念佛に歸しぬ。

と表白せられたのは、これである。なほ、この邊の消息は勅修御傳にくわしく記述してあるから、引抄する。

或時、上人(法然)おほせられていはく。出離の志、ふかゝりしあひだ、諸の教法を信じて、諸の行業を修す。おほよそ佛教おほしといへども、所詮戒定惠の三學をばすぎず。所謂小乗の戒定惠、大乘の戒定惠、顯教の戒定惠、密教の戒定惠也。しかるに、わがこの身は、戒行にをいて、一戒をもたもたず。禪定にをいて、一もこれをえす。人師釋して、尸羅清淨ならざれば三昧現前せずといへり。又凡夫の心は、物にしたがひてうつりやすし。たとへば猿猴の枝につた

ふがごとし。まことに散亂して、動じやすく、一心しづまりがたし。無漏の正智、なにによりておこらんや。若無漏の智劍なくば、いかでか、悪業煩惱のきづなをたゝんや。悪業煩惱のきづなをたゝすば、なんぞ生死繫縛の身を、解脱することをえんや。かなしきかな、かなしきかな。いかゞせん、いかゞせん。こゝに我等ごときは、すでに戒定恵の三學の器にあらず。この三學のほかには、我心に相應する法門ありや。我身に堪たる修行やあると、よろづの智者にもとめ。諸の學者に、とぶらひしに。をしふるに人もなく、しめすに輩もなし。然間なげきく、經藏にいり。かなしみく、聖教にむかひて、手づからみづから、ひらき見しに。善導和尚の觀經の疏の、一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念々不捨者是名正定之業順彼佛願故といふ文を見得てのち、我等がごとくの無智の身は、偏にこの文をあふぎ、もはらこのことはりをたのみて、念々不捨の稱名を修して、決定往生の業因に備べし。たゞ善導の遺教を信するのみ

にあらず。又あつく彌陀の弘願に順せり。順彼佛願故の文、ふかく魂にそみ、心にとゞめたるなり。

とある。これ全く善導大師の指南によつて彌陀の本願を仰信せられた心懷を描いたものである。かくて法然上人は無限の尊重と恭敬とをもつて、一生涯、善導大師を讚嘆せられてある。

殊に、善導十徳を撰述して、本地は阿彌陀如來とし、垂迹には十徳即ち

至誠念佛徳

三昧發得徳

佛從口出徳

爲師決疑徳

造疏感夢徳

化導盛廣徳

遺身入滅徳

敬徳造寺徳

遺文放光徳

形像神變徳

をあげて、その徳を奉讃せられたことを見ても、その恭敬のありさまが窺はれる。

また、夢想の告によりて證誠を感得されたことも、法然上人の偏依善導の内感を窺ふに足るものである、西方指南鈔には「法然上人御夢想記善導御事」と標して次の一文がある。

或夜夢みらく。一の大山あり、その峯きわめて高し、南北ながくとおし、西方にむかへり。山の根に大河あり、傍の山より出たり、北に流たり。南の河原、眇々としてその邊際をしらず、林樹滋々としてそのかぎりをしらず。こゝに源空、たちまちに山腹に登て、はるかに西方をみれば、地より已上五十尺ばかり

上に昇て、空中にひとむらの紫雲あり。以後、何所に往生人のあるぞ哉、こゝに紫雲とびきたりて、わがところにいたる。希有のおもひをなすところにすなわち紫雲の中より、孔雀鸚鵡等の衆鳥とびいで、河原に遊戯す。沙をほり濱に戯、これらの鳥をみれば凡鳥にあらず、身より光をはなちて、照曜きはまりなし、そのうち、とび昇りて本のごとく、紫雲の中に入畢りぬ。こゝにこの紫雲このところに住せず。このところをすぎて、北にむかふて山河にかくれ畢ぬ。また以後、山の東に往生人のあるにや。かくのごとく思惟するあひだ、須臾にかへりきたりて、わがまへに住す。この紫雲の中より、くろくそめたる衣著たる僧一人、とびくだりて、わがたちたるところの下に往生す。われすなわち、恭敬のためにあゆみおりて、僧の足のしもにたちたり。この僧を瞻仰すれば、身上半は肉身すなわち僧形也。身よりしも半ば金色なり、佛身のごとく也。源空、合掌僂頭して問てまふさく、これ誰人の來りたまふぞやと。答て曰、われ

はこれ善導也と。また問てまふさく、なにのゆへに來たまふぞや。また答曰、余不肖なりといふども、よく專修念佛のことを言、はなはだもて貴とす、ためのゆへにもて來也。また問て言く、專修念佛の人、みなもて爲_二往生_一哉と。いまだ、その答をうけたまはらざるあひだに、忽然として、夢覺了。

この夢想記はよほど有名なものであつた、聖覺法印の十六門記にも「善導來現授教門」として記されてある。この夢想は時間と空間とを越えて善導と法然との兩聖の一致を示し直接せる相傳を示すものとして重視せられる。

且つかゝる偏依善導の感佩はもとより法然上人の獨特の内感と卓拔せる批判からあらはれた己證であることは云ふまでもないけれどもかゝる己證に何等かの暗示を與へたものであるとすれば、それは横川の源信和尚であつた、法然上人は善導の依用者としての源信を尊重せられたことも、これを證據たつるものである。即ち、法然上人はその著往生要集略料簡の終に

私云、惠心已_レ定_二往生得否_一、以_二善導道綽_一而爲_二指南_一也。又處處_ニ多_ク引_二用_一綽導二師之釋_ヲ。然_レハ則_チ隨_ニ順_{スレ}惠心_ノ之輩、必當_ニ歸_ス依_ニ道綽善導_一、披_ニ安樂集_一明_二了_レ聖淨二門之意_一、閱_ニ觀經疏_一、領_ニ會_ニ安心起行之旨_一、以_テ爲_ニ出離解脫準則_一也。といひ、また往生要集證要の終釋にも

集主決_ニ判_ニ往生ノ得否_一、專_ニ用_ニ善導_一、專_ニ雜_ニ二修_一。此_レ則_チ嫌_ニ雜修雜行_一、勤_ニ專修_一、正行之旨_一炳然_ニ可_レ知_一焉。

とのたまふ。

これらによつても、法然上人の偏依善導の己證は源信和尚によつて暗示されたことが察せられる。

それでは、源信和尚はいかなる徑路をたどつて、善導大師に因縁を結ばれたのであらうか。それは、台門念佛の祖たる慈覺大師に源を發するやうである。慈覺大師は善導大師の景仰者であつた、舜昌の述懐鈔によると

慈覺大師は自他をして、極樂淨土に爲_レ令_レ生、不斷念佛を修して、必ず往生の因を開き、於_二菩提_一永_レ退轉せじと願ひ給ひ、念佛傳燈の引聲を寶池の波に和し、西方懺法の儀則を稱名の行にをかる。彼の西方懺法には善導の禮讚、略懺悔、發願廻向之勸文を引用せらる。善導勸化の念佛を依用し給へる事明也といふ。而して、さらにその慈覺大師は五台山の法道和尚から念佛をうけられたといふ。山門堂舎記には

昔、期那國の法道和尚、定に入りて、現身に極樂國に往生し、親しく水鳥樹林念佛の聲を聞く。和尚、定を出で、以てかの法音を傳へ、五臺山に流布す、慈覺大師入唐して法を求むるとき、五臺山に登り一夏の間、その音曲を學ぶ、また叡岳に傳ふ。

としめし、天台名目類聚鈔(七帖見聞)に淨土宗の相承を示す條下に次の如くのべである。

日本傳來の事、答ふ、その初を知らずと云云、覺(慈覺)大師渡唐の時、法道和尚に値ふて、引聲の阿彌陀經念佛三昧を相傳して歸朝し給へり。

と示してある。こゝに法道といふのはいかなる人か審かでないが、法照をさしたやうに察せられる。親鸞聖人は唯信鈔文意には法照と法道と同一人とせられてある。即ち

この文(五會讚)は、後善導法照禪師とまふす聖人の御釋なり、この和尚をば法道和尚と慈覺大師はのたまへり、また傳には盧山の彌陀和尚ともまうす、淨業和尚ともまうす、唐朝の光明寺の善導和尚の化身なり、このゆへに後善導ともまうすなり。

と仰せられた。近時發見した燉煌本の五會法事讚には、法照みづから五會念佛の由來をのべて

照、以_二永泰二年四月十五日_一、於_二南岳彌陀台_一廣發_二弘願_一(中略)阿彌佛歡喜告_二

とて、彌陀如來より直傳せる五音律であるといふ。上の法道のそれと同趣である。そこで、法照のことを法道といつたのかも知れない、けれど法照と法道と同一人とすれば慈覺の面授といふことは不審となる、慈覺が開成三年に入唐した、法照はその以前の貞元十八年に寂を示して居る、しかしこれは慈覺が五會讚を傳來し、五會念佛を傳授してきたことを聊か誇張したとすれば問題はない、あるひは法照と法道とは別人であつて、法道は法照の弟子であつて、その法道に慈覺が面授したのである、しかもそれと同時に法照の五會讚を傳來したので「この(法照)和尚をば法道和尚と慈覺大師はのたまへり」といふ傳説を生じたのかも知れない。とにかく、法照と法道との同異、慈覺の面授と相傳、これには尙ほ問題はある、唯信鈔文意はその頃の傳説(近いところでは雲參の佛祖傳集にも慈覺を天竺の人としてゐる)をそのままつたへて「この文は慈愍三藏とまうす天竺の聖人

の釋なり」と仰せられたこともあるから、今もそれと同じ筆法で、その時代の傳説をそのまま傳へられたのであらう。圖らず議論に外れたが、要するに、慈覺大師は日本に於ける善導及びその系統の法照若くは法道を紹介せる先驅である。その慈覺から慈惠をとほして源信に及び、さらに皇覺、皇圓をとほして法然の思想に暗示を與へたものと窺はれる。かくの如く、善導景仰の氣分は台嶺念佛の源頭から存するにもせよ、善導大師を本質的に會得してその眞意を傳へたものは法然上人である。この善導大師と法然上人の二祖を相承して淨土教の本質を顯はせるは親鸞聖人である。かくて、さきに嘆異抄の第二條を引證したごとく、彌陀釋迦二尊の慈教が、善導法然の二祖に傳持せられて、念佛成佛是真宗が成立したと系譜づけたのが親鸞である。故に、七祖相承は源空一祖の敬信に終結すると共に、善導法然の二祖傳持を根幹とすることを忘れてはならない。

(四) 五祖相承の展開

法然上人の相承觀の第二の様式は五祖相承の様式である。いはゆる五祖相承の様式を窺ふにあたり、まづ注目すべきことは、法然上人に類聚淨土五祖傳といふ著述がある。著述とはいふものゝ實はその題目の示すとほりに五祖の傳記を類聚せられた一種の備忘録である。故に了惠がこれを漢語燈錄に蒐輯するにあたり

當時、空上人(源空)諸傳のうちより淨土五祖の高妙の徳を類聚したまへり。

と附記してゐる、この書はかゝる諸傳記即ち唐高僧傳、安樂集、淨土論(迦才)、瑞應傳、新修往生傳、淨土文(龍舒)、念佛鏡、宋高僧傳の類聚にすぎない、けれども淨土の五祖を選取せられたところにおのづから法然上人の相承觀を窺ふことができる、五祖とは曇鸞法師・道綽禪師・善導禪師・懷感法師・少康法師である。法然上人はこの五祖を淨土教の正系と觀てとられたわけである。

次に注意すべきは五祖影像の傳來といふことである。勅修御傳には法然上人の命によつて俊乘房重源が唐から五祖の眞影を將來した記録がある。いはく

震旦に淨土の法門をのぶる人師おほしといへども、上人、唐宋二代の高僧傳の中より、曇鸞・道綽・善導・懷感・少康の五師を、ぬきいでし。一宗の相承をたて給へり。其後、俊乘房重源、入唐のとき、上人仰られていはく、唐土に五祖の影像あり、かならずこれをわたすべしと。これによりて、渡唐の後、あまねくたづねもとむるに。上人の仰たがはず、はたして五祖を一鋪に圖する、影像を得たり。重源いよ／＼、上人の内鑑冷然なることをしる。かの當麻寺の曼陀羅は、彌陀如來化尼となりて、大炊天皇の御宇、天平寶字七年に、をりあらはし給へる靈像なり。序正三方の縁のさかひ、日觀三障の雲のありさま、人さらにはわきまへがたかりしを。のちに、文徳天皇の御宇、天安二年に、もろこしよりわたれる、善導大師の御釋の、觀經の疏の文を見てこそ、人不審をば、ひらき

侍しか。天平寶字七年より、天安二年にいたるまでは、九十六年なり。そのかみ吾朝にて。をられたる曼陀羅の、はるか後にわたれる、觀經の疏の文に、符合せるをば、不思議とこそ申傳て侍れ。いま上人さきだちて淨土の宗義を、ひらきたまひ。後に重源入唐の時、かの影像をわたすべきよしを、命せられ、わたすところの影像。上人の仰にたがはざること、豈奇特にあらずや。されば道俗貴賤、かの五祖の眞影を拜して、いよく上人の徳に歸し、ますく念佛の信を、ふかくしけり。當時二尊院の經藏に、安置するは、かの重源、將來の眞影なり。

これによれば類聚淨土五祖傳を蒐輯したのち、(この勅修御傳には類聚淨土五祖傳の名目を示していないが、九卷傳にははつきりかいてある)重源の入唐に際し、五祖一鋪の影像を請來することを命せられたことになつてゐる。従つて、この記述では五祖の選定は五祖影像の將來已前といふことになる。これを「内鑑冷然」

として讚歎すれば問題にならないが、しかし法然上人が重源に仰せられたうちに「唐文に五祖の影像あり」と示された言葉は如何なる根據を有するのであらうか、かゝる事實を豫め傳聞してゐられたのか、若くは唐宋の諸傳から推量せられたのであらうか、なほ考ふべき餘地があらう。遮莫、法然上人の相承觀はこれでいよいよ明白となる。

また、重源の發願によりて、建久二年、南都にて説法の砌、五祖影像を讚嘆せられてある。勅修御傳にいはいはく

壽永元曆のころ、源平の亂によりて、命を都鄙にうしなふもの、其類をしらずこゝに俊乗坊無縁の慈悲をたれて、かの後世のくるしみを救はむために、興福寺東大寺より始て、道俗貴賤をすゝめて、七日の大念佛を修しけるに、その比までは、人いまだ念佛のいみじき事をしらずして、勸めにかなふものすくなかりければ、俊乗房この事を歎て、人の信を勸めんがために、建久二年の頃、上

人を請じたてまつり、大佛殿のいまだ半作なりける軒の下にて、入唐の時渡し奉れる、觀經の曼陀羅、ならびに淨土五祖の影を供養し。又淨土の三部經を講せさせ奉りける。

尙ほ外記禪門(安樂房遵西父)七七日の逆修を修したとき、法然上人がその六大會の導師として說法せられた隨聞記たる逆修說法のうちにも五祖の影像を慶讚供養せられてある。

これらの事柄を綜合してみると、法然上人が五祖相承の様式をも充分に重視されたことを認めなくてはならぬ。而して、この五祖相承はいかな意圖によつて組織されたのであるか、また、それは七祖相承の様式とどんな關係を有つものであるか、進んでこれを考察しなくてはならぬ。

おもふに五祖相承を選定せられた法然上人の意趣は震旦の淨土教に對して批判を加ふると共に善導大師の獨歩の地位を擁立せられたものである。選擇集には

く

問て曰く。聖道家の諸宗に各師資相承あり。(中略)而るに今言ふ所の淨土宗に師資相承血脈の譜ありや。答て曰く。聖道家の血脈の如く淨土宗に亦血脈あり。但し淨土の一宗に於て諸家亦不同なり。所謂る廬山の惠遠法師慈愍三藏道綽善導等是れなり。今且く道綽善導の一家に依て師資相承の血脈を論ずる者なり。此れに亦兩説あり。一には菩提流支三藏惠龍法師道場法師曇鸞法師大海禪師法上法師(已上安樂集に出たり)。二には菩提流支三藏曇鸞法師道綽禪師善導禪師懷感法師小康法師(已上唐宋兩傳に出たり)

と、これと略々同一のことが逆修說法にも示されてある。これによると、法然上人が震旦の淨土教を三つの流派即ち慧遠流・慈愍流・善導流に分判せられ、そのうちの善導流に依られたのである。そしてこの善導流に兩説あるうち、五祖相承は第二傳に屬するものである。尤も菩提流支三藏をとりかけてあるが、これは曇鸞

法師の先駆であり教導であるところから、これを曇鸞法師に攝められたと観すべきであらう。

ひるがへつて観するに、支那の浄土釋家は悉くこの三流派を混雜してしまつて理觀と習禪の混雜した不純な念佛思想を取扱つてゐたのである。試みに法然上人の以前、唐土にあつて浄土教の祖流を論じたうち、典型的なものと考へらるゝ元照の意見を參考しやう。元照の觀無量壽經義疏卷上の「五指濫傳」の條下には浄土の教法、古晋の廬山の白蓮社より起り、自後、善導・懷感・慧日(慈愍)・少康の諸名賢ありて、今朝に至り逮る、前代の禪講師亦た多く弘唱す、たゞ天竺の慈雲法師、精しく教理を窮め、盛んに一時に振ふ。大小彌陀懺儀、往生傳、正信偈、念佛三昧詩ならびにもろ／＼の圖幃を出す、現に世に行はる。自後、能く繼ぐもの鮮し、時移り事變り、相承託濫して、この法幾もなく息む。

といつてゐる。これによると、元照は慧遠・善導・懷感・慈愍・少康・慈雲を系統づけて浄土教の正傳とするのである。これは三種の流派をひとつに混雜してしまつてゐる。ひとり元照のみでなく、多くはこの類ひである。従つて念佛思想の純正な發展は困難となり、また善導の地位が正當に認められないことになつた。

慈雲の往生浄土決疑行願二門には道安和尚の往生論、懷感法師の群疑論、道綽禪師の安樂集、慈愍三藏の浄土慈悲集、源信禪師の浄土集を列擧しながら、善導大師の章疏はひとつも標記されてゐない。善導の地位が明確に意識せられて居なかつたことがしのばれる。また上にひいた元照の觀經疏には善導の名をあげ、また

前代の解釋、凡そ數家あり、隋朝の慧遠法師、天台の智者大師、みな章疏あり。唐の善導和尚、亦た玄義を立つ、並び世に行はる。

とて、善導の章疏を注意してはゐるけれども、四帖疏のうち「玄義分」だけしかあげてゐないところをみると、その頃はもはや玄義分のみ漸く流布してゐたのであ

らう。晩唐から宋にかけて漢土においては善導大師の影がだん／＼うすくなつて行つた。たま／＼、善導は思出されても、民俗のうちに持囃された少康とか懐感とかいふ人たちによつて漸く聯想されたにすぎなかつたやうに思はれる。

かゝる事實を思ひ浮べてみると、漢土において正しく理解されず、獨歩の地位を認められなかつた善導大師が、日本の淨土釋家、とりわけて法然上人によつて推讃せられ、その權威を發揮されたといふことは因縁の深いことである。而して法然上人の支那淨土教に對する三派の甄別は、偏依善導の景仰からあらはれたもので、善導に獨立の地位を認めんとする意味深い批判であることに氣づかれやう。即ち、この三派を分判して、善導の流派を慧遠の流派や慈愍の流派の外にはつきりと甄別されたのは、稱名念佛の流派を觀念念佛の流派から獨立させたものである。かくして、いはゆる唯事口稱無觀稱名を主張して、廢觀立稱の批判的展開をこゝろみ、觀念から稱念へと純化した善導大師の念佛思想に、獨立せる權威と純

正な地位を與へたる批判である。まことに、法然上人によつて始めて善導大師の眞價が認識せられたわけである、かくの如く、三流の甄別によつて、善導の獨立を證明するには、勢ひ、その師資相承の系統を示さねばならぬ。これ、まさしく五祖傳持の相承が示された所以である。それゆへに、この五祖傳持の様式はさきにも述べた偏依善導の様式を擴充したもので、いよ／＼善導の地位をたかめるために、善導を中心人格として、その前景と後景を描いた莊嚴の様式に外ならない。故に、法然上人は、五祖相承の様式を型づくられたものゝ五祖を一樣に景仰されたものではない。たゞ、善導の師資として餘他の四祖は意味をなすので、四祖おの／＼獨立して觀察されるときは、自ら取捨を加へられたことは掩はれない事實である。即ち、和語燈錄 諸人傳説の詞のうちに。

信空上人のいはく、ある時、上人の給はく、淨土の人師おほしといへども、みな菩提心をすゝめて觀察を正とす、たゞ善導一師のみ菩提心なくして觀察をも

て稱名の助業と判ず、當世の人、善導の心によらずは、たやすく往生をうべからず、曇鸞道綽懷感等みな相承の人師なりといへども義にをいてはいまだかならずしも一準ならず、よくよくこれを分別すべし。

かくのごとく、その先駆たる曇鸞・道綽もその後繼たる懷感・少康も善導と肩をならべては認められなかつたのである。

この點になると、親鸞聖人の相承觀とはいつしかその風情を異にしてくる、親鸞聖人の七祖相承は法然上人の五祖相承を基礎として更らに洗練し更らに充實して成立したことは明白であるが、その各祖に對する見解にはおのづから差違を認めないわけにゆかぬ。親鸞聖人はもつと自由な立場から、各祖の純全な眞價を認めつゝその發展の迹をたどられたやうである。

(五) 七祖相承の結構

親鸞聖人の七祖相承は法然上人の五祖相承をうけて、更らに、これを批判しつつ擴充し整備せられたものである。

まづ、注意すべきことは、法然上人の五祖相承の様式は震旦に於ける淨土教の聖賢にかぎつて結構されたものである。然るに、親鸞聖人の七祖相承は天竺、震旦、日域の三國にわたる傳統の一大體系である。かくて、震旦の五祖を洗練して、曇鸞、道綽、善導の三祖とし、それに日域の二祖すなはち源信、源空をしろしつけ、更らに天竺の二祖すなはち龍樹、天親をとり入れて七祖を組織せられたわけである。従つて、七祖相承の體系の内容は五祖相承に比して大に豊かになつて居るわけである。然り而して、五祖相承から七祖相承への批判的擴充のあとを回想すれば略ぼ次のごとくである。

まづ、五祖相承のうち、懷感と少康とを省略せられたのはどうしたわけであらうか。それは善導大師もしくは源信和尚のうちに包攝せられたのであると觀察するのが、いちばん穩當のやうにおもふ。何となれば高僧和讃の善導讚のうちに「世に善導いでたまひ、法照少康としめしつゝ、功德藏をひらきてぞ、諸佛の本意とげたまふ」とある。これによつて少康を善導に包攝せられたことをおもふべきである。また、おなじく高僧和讃の源信讚には「本師源信和尚は、懷感禪師の釋により、處胎經をひらきてぞ、憊慢界をばあらはせる」とある。これによつて懷感を源信にすべくゝられたと窺ふても差支はあるまいとおもふ。而して、かくの如く包攝せられた所以は、法然上人が懷感を評して善導の思想を純正に相承したものとなさず、「師(善導)資(懷感)の釋その相違はなほだおほし」と稱せられたやうな點をも顧慮せられたのでもあらうが、むしろ大體において、懷感にしろ少康にしろ獨立したものととして尊重するほどの教義上の發揮をみとめられなかつたと解

釋すればよからう。

次に日本の二祖即ち、源信和尚と源空上人を加へられたことは極めて自然である。まづ、源信和尚は源空上人の先達として自他ともに敬慕し是認するところである。法然上人の以前においてわが國の淨土教を思ひ浮べると、まだ獨立しない寓宗時代ではあつたけれども、すぐれた先達は數おほくあつた、試みた淨土源流章によれば、日本淨土の祖として智光、昌海、源信、永觀、實範、源空の六師をあげてある。また、私集百因縁によると源信、永觀、法然を日本の三祖としてある。なかんづく、源信僧都は往生要集をつくつて、内外に至大の影響を與へられた淨土教の代表者であり、法然上人の先驅として忘るゝことのできないお方である。拾遺古德傳には法然上人のお言葉として「予、往生要集を先達として淨土門に入るなり」としてある、また勅修御傳には源信和尚を景仰し往生要集を感戴せられたことが處々に示されてある。即ち

後白河法皇勅請ありければ、法然上人法住寺の御所に參じたまひて、一乘圓戒をさづけ申されけり、山門園城の碩徳をめされて、番々に往生要集を講じ、亦おの／＼所存の義をのべさせられけるに、上人おほせにしたがひて、披講し給ひけるに、往生極樂の教行は濁世末代の目足なり、道俗貴賤たれか歸せざるものともみあげ給ふより、はじめてきこしめさるゝやうに御きもにそみてたうとく御感涙はなはだしかりけり

といふ感激のありさまもある。また入信の因縁をのべたまふや

惠信(源信)の先徳往生要集をひらくに、往生之業念佛爲本といひ、又かの人の妙行業記に文にも往生之業念佛爲先といへり。(中略)然則、源空は大唐の善導和尚のをしへにしたがひ、本朝の惠心の先徳のすゝめにまかせて、稱名念佛のつとめ長日六萬遍なり、云云

とある。まことに法然上人の選擇本願念佛集の標擧の「往生之業念佛爲本」は全く

源信僧都の撰述から頂戴せられたものである。この意味において往生要集の展開したものが選擇本願念佛集であるともいへる。かくて、源空上人のまへに源信和尚をあげらるゝことは源空上人のお思召にもかなふことである。

最後に天竺の二菩薩即ち龍樹と天親とを加えらるゝことも、自然な擴充である。曇鸞和尚を崇むるものはおのづから龍樹菩薩と天親菩薩とを仰がずに居れない、即ち、曇鸞和尚の往生論註は天親菩薩の淨土論を注釋したものである、そしてその往生論註の冒頭には龍樹菩薩の十住毘婆沙論易行品の難易二道の鴻判を引用して、相承の源流を示されてある。しかのみならず、曇鸞和尚は讚阿彌陀佛偈に本師龍樹摩訶薩、誕形像始類網を理め、邪扇を關閉して正轍を開く、これ閻浮提の一切の眼なり、尊語を伏承して歡喜地にして、阿彌陀に歸して安樂に生ぜしむ、譬へば龍動いて雲必ず隨ふごとく、閻浮提は百卉を放つて舒ぶ、南無慈悲龍樹尊、至心に歸命して頭面に禮したてまつる

とて龍樹をば淨土教の祖師として讚嘆せられてある。親鸞聖人はかゝる點からして支那淨土教の鼻祖たる曇鸞和尚の思想を開展しつつ、正しい傳統を求められたものである、而して、親鸞聖人は龍樹と天親の二菩薩を仰ぐことによつて、教主釋尊との間斷なき傳統を内感されたやうである、即ち楞伽の懸記に應じて出現したまへる聖者として龍樹菩薩をたゞえては「南天竺に比丘あらん、龍樹菩薩となづくべし、有無の邪見を破すべしと、世尊はかねてときたまふ」とまうされ、また一代佛教の眞實の開顯者として天親菩薩を嘆じては「釋迦の教法おほけれど、天親菩薩はねんごろに、煩惱成就のわれらには、彌陀の弘誓をすゝめしむ」とまうされた。かくの如く教主の傳者としての龍樹菩薩と、教法の開顯者としての天親菩薩とを系譜づけることによつて相承の體制が完全するのである。

而して、かく天竺の二祖を加ふることは、善導大師の意圖にもかなひ、法然上人の思召にも相應することである。即ち、善導大師の往生禮讚偈には六時禮讚偈

をつくるにあたりて「謹んで大經及び龍樹、天親、此土の沙門所造の往生禮讚によりて集めて一處によらしめ、分つて六時となす」としるし、中夜偈に龍樹菩薩の十二禮をおさめ、後夜偈に天親菩薩の淨土論の願生偈をおさめてある、往生淨土の先達として敬慕せられたことを想ふべきである。

次に法然上人とても同じ意趣であらせられた、辨長の淨土宗要集のうちに天竺念佛祖師事を論述するにあたり、その前置として次の詞を引抄してある、すなはち、

我が法をば天竺の大菩薩も弘め給ふ、祖師と言が爲に、天親菩薩の往生論を造りたるがうれしきぞとありし也。法然房は阿彌陀經を三部經に入れ給ひたる

と、天親龍樹の祖師にて御ますを喜給ひし也、天竺の英才にて御ます故也と、これらによつても、天竺の二祖を加ふることは極めて至當なことであり、公論といふべきである。

しかしながら、偏依善導の法然上人にありては曇鸞和尚はたゞその先驅として仰がれたので、善導大師に對立し若くは對比して獨立の地位を與へられなかつたのである。従つて天親菩薩、龍樹菩薩にしても、それと同様であつたと觀察しなくてはならぬ。

これに比べると、親鸞聖人は七祖相承はおのおの獨立した地位を與へられた、特に注意すべきことは「偏依善導」の傳統に加ふるに「宗師曇鸞」の己證を以てせられたのである。言葉を換へていへば、法然上人の五祖相承にありては、曇鸞和尚は善導大師の先驅として認められたのであるが、親鸞聖人の七祖相承においては、曇鸞和尚は別個の立場において崇重されたのである。この點が、七祖相承の有する特徴として注意されなくてはならぬ、この點において上三祖は曇鸞和尚を中心とし、下四祖は善導大師を中心として結構されてあるわけである。

いまこれを教義の内容からいへば「念佛往生」は善導大師によつて啓拓せられ

た純正淨土教の基軸である。そしてこの「念佛」について、善導大師は「稱名念佛」なることを示し觀念を斥けて凡夫相應の白道をひらき、源空聖人は「專修念佛」を標しづけて雜修を斥け念佛の獨立を確かめられたのである、而してわが親鸞聖人は「正信念佛」に歸することを釋して、こゝに唯信獨達の眞實を開顯せられたのである。そして、この眞實を開顯するにあたりて、如實修行と他力回向との釋義を依用せられてあるが、これは全く曇鸞和尚をうけ世親菩薩をうけられたものである。即ち、五念門のうち讚歎門の釋義に基いて如實修行の立場を審にし廻向門の釋義に基いて他力回向の玄旨を鮮やかにせられてある。そこで證卷の終には次の如く結釋せられてある。

爾れば、大聖の眞言、まことに知んぬ、大涅槃を證することは願力の回向によりてなり、還相の利益は利他の正意をあらはすなり、こゝをもて論主は廣大無礙の一心を宣布して、あまねく雜善堪忍の群萌を開化す、宗師は大悲往還の廻

向を顯示してねんごろに他利々他の深義を弘宣したまへり、あふいで奉行すべし、ことに頂戴すべし

こゝに「論主」とは世親菩薩であり、「宗師」とは曇鸞和尚である。これ、善導大師によりて提示された念佛往生の眞實を顯開するに曇鸞和尚(世親菩薩)の釋義を依用せられたことを示すもので、同時に曇鸞和尚(世親菩薩)の地位を重視するものである。

かくの如く親鸞聖人は「偏依善導」の旨趣に加ふるに「宗師曇鸞」の卓見を以つてせられた。而して、この「宗師曇鸞」と「偏依善導」との綜觀は決して牽強附會でないことを示すために、充分の努力を支拂はれてある。今これについて、二三の點を注意しておくことゝしたい。まづ

爰に、愚禿釋親鸞諸佛如來の眞說に信順して、論家釋家の宗義を披見す、廣く三經の光澤を蒙て、特に一心の華文を開く

と仰せられてある。こゝに「論家」とは龍樹、天親の二菩薩をさし、「釋家」とは、曇鸞、道綽、善導、源信、源空の五人師をさしたもので七祖を該稱したものである、けれどもこれを詮じつめると論家は天親であり釋家は善導である。天親、善導によりて信卷別開の由縁をのべられたものと解すべきである。次に淨土文類聚鈔の最後の結歎に次の如くのべてある。

論家、宗師淨土眞宗をひらきて、濁世の邪偽を導かんとなり、三經の大綱、隱顯ありといへども、一心を能入と爲す、故に經の始めに如是と稱す論主は建めに一心とのたまふ、すなはちこれ如是の義をあらはす、今、宗師の釋を披きたるに、いはく如意といふは二種あり云云

と、これ天親、善導の二師にみちびかれし獲信の因縁を感戴したまふものである。こゝの「宗師」とあるのは何人をさしたものに於いて異論はある、もと、親鸞聖人の用例からいふとこの「宗師」の語ほど多様なものはない、けれども、今

この「宗師」は善導大師を指されたものである。何となれば次下に引抄してある「如意」の釋たる「宗師」釋とは定善義のものであるから、善導大師と觀すべきである。これ、世親菩薩の「一心釋」と善導大師の「如意釋」とを一致せしめて、正信念佛の己證の相承せられたもので、世親と善導の符節を合することを示されたものである。

尙ほ、入出二門偈は、世親菩薩の無量壽經論即ち淨土論によつて他力回向の釋義を展開したものであるが、これの相承として

曇鸞 和 尙 大 殿 寺

道 綽 禪 師 玄 忠 寺

善 導 禪 師 光 明 寺

の三祖を列擧されてある。これ曇鸞和尙(世親菩薩)と善導大師(道綽禪師)との釋義の相違せざることを示されたものである。

また、如來二種廻向文もまたこの入出二門偈と同調である。その始めは

無量壽經優婆提舍願生偈曰、云何廻向、不捨一切苦惱衆生心常作願廻向爲首、得成成就大悲心故文この本願力の廻向をもて、如來の廻向に二種あり、一には往相廻向、二には還相の廻向なり、往生の廻向につきて、眞實の行業あり、眞實の信心あり、眞實の證果あり

とのべ、これを結ぶに

自利々他ともに行者の願樂にあらず、法藏菩薩の誓願なり、他力には義なきをもて義とすと、大師聖人はおほせごとありき。よくこの選擇悲願をこゝろえたまふべし

とある、これ廻向釋義は世親菩薩に始まり、大師聖人即ち法然上人の「無義爲義」に歸することを示されたので、世親と法然との一致を示すもの、同時に曇鸞と善導の一致を示すものである。

これを要するに、七祖相承の結構には法然上人の相承觀をうけてこれを展開すると共に、親鸞聖人の己證によつて充實され擴大された、しかも力強く綜括されたことを理會すべきである。

後の言葉

曾て、龍谷大學講義録に眞宗相承論といふ小篇をものしたことがある、その小篇を素材として多少の添削を加へたのがこの一篇である。

なほ、七祖相承と太子崇敬との關係をかんがへ、法然上人と親鸞聖人との聯絡をあざやかにする上に聖覺法印や隆寛律師の參考すべき所以を述べ、並に光明本尊の結構と七祖相承との關係について、叙述したい意圖を有してゐたが、紙數の制限があるので、これは次の機會に譲つた。

更に、七祖聖教に關しても幾多の疑義と私見とを有してゐる、且つ宗典の完成に幾多の念願を抱いてゐるのであるが、これまた、別に論述して世に問ふことにしたい。

昭和八年一月初旬

顯眞學苑にて 著 者 識

昭和八年二月五日 印刷
昭和八年二月十日 發行

定價金四拾錢

送料四錢

著者

梅原真隆

發行者

京都市賀茂板倉町顯真學苑代表
玉置箱晃

印刷者

京都市壬生川通り五條下ル
藤澤淨圓

發行所

京都市加茂板倉町六一

顯真學苑出版部

振替大阪八七五三一番

終

